

## 人間同士の繋がり

——『ワイルドフェル・ホールの住人』からジョージ・エリオットへ——

齊 藤 健太郎

### はじめに

同世代のアン・ブロンテ (Anne Brontë) と、ジョージ・エリオット (George Eliot) は今まで結び付けて考えられることが、あまりなかった。しかしながら『ミドルマーチ』(*Middlemarch*)における共同体の中の複雑な人間関係や、人間同士の結びつきなど、エリオットが強調したイメージが、アンの『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*)のヘレン (Helen Huntingdon) とギルバート (Gilbert Markham) やその周辺を通じて垣間見ることができる。これを踏まえて本論では、ヘレンと共同体の人々との関わりに注目し、さらには、彼女と興味深い対照をなすドロシア (Dorothea Brooke) との関係を考慮に入れて、この2つの作品を中心に分析していく。またヘレンとギルバートの芸術を介して結び付けられる人間関係と、ある種の平行をなすドロシアとラディスロー (Will Ladislaw) のそれも分析する。共同体とそこに暮らす人々の人間関係が、作中でどのように作用しているかを中心にみることで、アンとエリオットの関連性を考察したいと思う。

### 1 ヘレンと共同体

夫ハンティンドン (Arthur Huntingdon) の元を逃げ出したヘレンが住処とする、ワイルドフェル・ホールの位置する物理的な「高さ」は、冒頭から圧倒的な迫力をもって描かれる。ヘレンがこの高みのワイルドフェル・ホールを降りることで、周囲の人々との交流に巻き込まれてゆく人間関係のさまは、まさにジョージ・エリオットの世界を思い起こさせるかもしれない。

この強調される「高さ」が表すものは、まさに階級であり、そのワイルドフェル・ホールをはじめ、ヘレンの位置する場所（の高さ）が絶えず、不安定さと、揺らぎをもって描かれていることは、注目に値する。これは言うなれば、彼女の属する階級の揺らぎに加え、その階級に定着した家庭の天使といった、既存の価値観のぐらつきとも関係しているのではないだろうか。

ヘレンの住むワイルドフェル・ホールは、その物理的に知覚（強調）される「高さ」に加えて、荒れ果てた、寂しい場所として描かれている。「そこにあるすべてが悪鬼の様相を呈しているよう」だと、ギルバートによって評されるその住まいは、「険しい上り坂を進んで」ようやくたどり着く高台に位置する。この繰り返し強調される「高さ」を、彼女の位置する階級の高さとリンクして考えると、そのワイルドフェル・ホールの地が、すでに廃れ始めていることは、まさに彼女の属する階級そのものの後退を暗示しているのではないか。画材を求めて皆と一緒に出かけたピクニックで、ヘレンは「険しい上り坂の頂上」にある、クリフに向かう。「険しい、石の多い丘を、もっと高く、かなり遠くの、もっと切り立った上まで行き」、まさに崖っぷちでスケッチをするヘレンには、絶えず物理的な高さの描写が伴う。ここで注目すべきことは、ギルバートの忠告を無視してまで、クリフの先端に進み出るヘレンの足場だけが、危険にさらされることだ。つまりは、上流階級に属するヘレンの足元だけが、絶えず揺

らいでいるのである。そんな土台の緩んだ場所を求め、高みに暮らすヘレンの上流階級の領域を、下界に住み彼女を愛するギルバートが脅かす構図になるのだ。<sup>1</sup>ヘレンの価値観の変容は、彼女が最終的にこの高台を降り、下界のリンデン・カー（Linden-Car）に住む、自分より身分の低いギルバートと結ばれることでも明らかになる。

そんなヘレンが、夫の元を逃げ出した後、周りの人々との接触を避け、隠者としてワイルドフェル・ホールでの生活を過ごそうと試みてもそれはかなわない。彼女がどんなに交流を避けようとしても、下界に住むギルバートをはじめとする人々との人間関係に巻き込まれてゆくのだ。ヘレンは、近隣に住む人々のうわさの中心となり、彼女は人々の渦の中に取り込まれてゆく。これは、ある種『ミドルマーチ』における、網の目（web）のイメージを思い起こさせる。<sup>2</sup>ヘレンだけが、寂しい孤立した館に住みながら世間との接触を避け、いくなれば傍観者としての立場を貫くことは許されないのである。

それぞれの人生が結びつき、関連性をもって作用していることを、このヘレンというヒロインが暗に示している。ギルバートは、その階級の持つ価値観というボーダーに果敢に挑む。そしてギルバートは、ヘレン自身もまた、階級にとらわれない広い意味での、社会の網の目を構成する一人であることを、彼女に気づかせる役目を果たしているのではないか。ヘレンが、ギルバートと出会い結ばれることで、本来は、階級的には接点を持たない、ギルバートをはじめとする下層中産階級の領域と、ヘレンに代表される上流階級のそれが、関連性をもっていることが示される。クモの巣のように、それぞれの違う人生が相互に絡み合って、関係を持ちながら、ミドルマーチという一つの共同体が構成されているように、ヘレンもまた、自分が住むその地域、ひいては社会という織物を構成する重要な要素（糸）の一部なのだ。したがって、彼女もその共同体との関わりから逃れ、

無関係でいることは許されないのである。

ヘレンのストーリーには、過去の人間関係を断った孤独な主人公が、新しい環境で共同体との関わりによって救われるエリオットの『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*)と興味深い対照をなしている。エッピー (Eppie) という子供の出現により、サイラスは共同体の中の人間関係の中に巻き込まれ、外の世界と結びつけられる。サイラスは、エッピーの育て方のことなどをめぐり、村の人々と語り合うことになる。ヘレンにもアーサー (Arther) という子供がおり、そのアーサーが、ヘレンとギルバートを結び付けることに一役かうのだ。「返礼の訪問」を求められるヘレン親子は、ギルバートの暮らすマーカム家の人々を訪ね、彼女は息子の教育方針について人々と議論を交わす。あるときは、彼女は牧師の忠告により、教会へと足を運ばざるおえなくなる。ヘレン自らも、ギルバートやその妹ローズ (Rose Markham) をはじめとする近隣の人々の訪問をたびたび受けることで、ヘレン (親子) が、否応無しに、ギルバートの属する社会 (共同体) という外の世界と結び付けられていくことが分かる。

ヘレンにとっての、リンデン・カーという共同体が、彼女の素性をあばきたて、様々なうわさをたてる場所であることを考えれば、そこは必ずしも彼女にとっての安住の地とは言えないかもしれない。しかしヘレンが、ハンティンドンに象徴される墮落した怠惰な生活を逃れ、人々との交流に巻き込まれることでギルバートと出会うのも、まさにこの共同体であるのだ。また、ヘレンへの中傷を一切信じず、忠実な友として彼女を支えるメアリ (Mary Millward) と出会うのもこの場所である。クリフでの写生の折に、ヘレンが信頼して自分の息子を預ける唯一の人物がこのメアリであり、ヘレンは、メアリのなかに「たくさんの素質」を認め、この二人の女性性は相互的な信頼関係 (絆) で結ばれている。ヘレンはまさに、この共同体の中で、彼女自身が積極的にそれを求めたのではないにせよ、人々との

交わりを通じて、画家として自立を試み、人と人が関わることの大切さを知ることになるのだ。

エリオットの共同体を描く姿勢において、古きよき時代の農村共同体を描いた『サイラス・マーナー』と、社会の近代化の進み始める中での、後期の『ミドルマーチ』の地方都市とでは、その描き方に違いが生じるのも当然であろう。ヘレンと同様に、結婚の失敗を味わい再婚に至るドロシアにとっての共同体もまた、ラディスローとの仲を監視する周囲の人々に悩まされることで、けて居心地のよいものではなかったはずだ。ドロシアは最終的に、新しい夫ラディスローと共に、共同体のないロンドンへ行くことになる。しかし重要なことは、ミドルマーチを去った後も、ドロシアは、「少なくとも年に二回（ミドルマーチの）ティプトン屋敷（Tipton Grange）を訪ね」ることで、おじと妹夫婦との絆を大切に、その共同体の人々と交流を持ち続けることだ。これを考えれば、エリオットの、共同体とそこに暮らす人々によせる思いや重要性もおのずと分かるだろう。

ヘレンとドロシアの結末には違いがあるにせよ、二人の女性主人公は、絡み合う人間関係を土台とする共同体での生活を通じて、人と人との繋がりの大切さを認識するに至る。ヘレンは最終的に、リンデン・カーには戻らず、年老いたおばが長年慣れ親しんだスタニングリー（Staningley）で、「おばが活着ているかぎり」共にそこで暮らすことで、彼女との絆を大切にす。しかし、ヘレンが大きな信頼を置いたメアリが、ヘレンに対する偏見が溶け、名誉の回復した、そのリンデン・カーの地で、牧師の妻として夫と住民に愛され、幸せな結末を迎えることも見逃してはいけない。ギルバートの妹ローズが、ヘレンの「吉報」を人々に知らせに走り、その地でのヘレンの信用が取り戻されたことを喜ぶ一方、「中心になって」ヘレンのうわさを「計画的に撒き散らしてい」た二人の婦人（Eliza MillwardとJane Wilson）には、作者による幸せな結末は保証されないの

である。アンは、共同体とそこに暮らす人々の人間同士の繋がり的重要性を我々に示し、また一つの社会（共同体）が、階級は別として、人間同士の絡み合いによって網の目のごとく成り立っていることの一部を、ヘレンのギルバートをはじめとする人々との関係を通じて示していると言えるのだ。

## 2 ヘレンとドロシア

強過ぎる信心深さと理想と情熱を持ったヘレンが、夫に失望することで現実に直面し、幽閉を経験した後、夫の死後に真のパートナーとの結婚に至る構図はまさにドロシアのそれと共通する。ヘレンとドロシアの経験するローマでの新婚旅行の場面も、ある種の対照をなして描かれている。

ヘレンの外国での新婚旅行に関する描写は、彼女の日記には、わずかしか記されていない。しかしその異国の地で、夫ハンティンドンによって行動が制限されることで、ヘレンの不安や孤独が増すと共に、人と繋がりたいという気持ちが強調されることになる。彼女はその旅行を「相手と感動を共にすることができなかったという思い出から惨めなもの」だったと語り、新婚早々から夫婦の間には何の交流も存在しないことを告白する。夫は「まるでわたし（ヘレン）がひ弱な蝶であるかのように、世間に、とりわけパリやローマという世間に触れさせ」ることを恐れ、彼女には絶えず幽閉のイメージがつきまとう。夫は妻を従来女性の持ち場である家庭の中へ閉じ込めることを望むのだ。つまり、夫が妻に求めるのは、「蝶」(butterfly) の様にか弱く、その色彩に富んだ美しい羽が示すような、きれいな装飾品としての家庭の天使であることが、この比喩に示されている。

異国というつながりで考えれば、新婚生活を経てヘレンが、夫の元を去る決意をした後、移住の候補地として、ニュー・イングランド (New

England) をあげている。彼女は、「大西洋を渡り、ニュー・イングランドに静かで質素な家を求め、」画家として生計を立てることを思いつく。しかし、そのアメリカ行きの話は、それ以降、語られることがない。最終的にヘレンが避難場所を選ぶのは、「兄とわたし（ヘレン）が生まれ、そしてわたしたちの母が亡くなったあの古い館」であり、つまりは、彼女にとっての生家ワイルドフェル・ホールなのだ。John Sutherland は、ヘレンがアメリカではなく、自らの生家ワイルドフェル・ホールを選択するにともなう危険（例えば、夫が、妻の生家を知り、容易に妻を見つけ出す可能性など）を指摘し、ヘレンの決定に疑問を呈している。<sup>3</sup>彼女の最大の目的が夫の追跡を逃れることを考えれば、確かに、アメリカ移住を選択しないヘレンの行動は不自然かもしれない。しかしここでは、彼女が無意識にせよ、危険を承知の上で自らの生家を選んだことに大きな意味があるのだ。

物心がついたときには、すでにおじとおばに育てられたために、ヘレンには生家に対する記憶や愛着はないかもしれない。だが注目すべきは、夫の元を逃げ出したヘレンが、幼少期にはなしえなかったその地での人々との交流を、大人になり再び取り戻すことである。またその過程で彼女は、長い間疎遠になっていた兄ロレンス（Frederick Lawrence）との絆をも取り戻すことになる。昔からの土着の人々との関係を、ヘレンが再び年月を経て構築する運命にあることは、複雑に絡み合う人間関係のウェブのイメージに通じる。外国ではなく、ワイルドフェル・ホールにヘレンが戻ることには、アンのイギリスに対する土着意識や、共同体における人間関係に対する思いまでもが反映されているのかもしれない。

次に、対照的なドロシアのローマでの新婚旅行の場面を見てみる。ドロシアもまた、「曲がりくねった階段の迷路の中に迷い込んで」先の見えない研究を続ける夫カソーボン（Edward Casaubon）に取り残され、異国の地でヘレン同様に孤独を感じ、人と繋がりたいという気持ちを持つ。そん

な「歴史のとほうもない断片に」あふれる「歴史の都ローマ」に一人で取り残され「暖炉のほてりよけ程度の美術しか知らずに育った」ドロシアは、過去の歴史の遺物に圧倒され、もがくのだ。語り手は、そんなドロシアを、「色褪せたもの、けんらんたるもの、・・・彼女がそのことを考えていない時でも、記憶のなかに根をおろして、その後の年月を通してつきまとう不思議な連想の源になった」と述べ、ここに、リンク（つながり）のイメージが提示される。このローマの地で、今までドロシアの中でぶつ切りになっていた歴史観がつながり始めるのだ。ヘレンとは違い、ドロシアには幸いなことに、この歴史の都ローマを肌で感じるだけの、十分な時間が与えられ、またこの地でラディスローと再会し、対峙することになるのだ。「世界史の各時代を、たがいの間に根本的なつながりをもたぬ箱かなんぞのように区切られたものと見なす」ことに否定的な見解をドロシアの前で示すラディスローは、歴史が有機的に結び付いていることを理解できる人物である。「絵にくらべると言葉はもっと豊かなイメージを与える」と語り、「言葉」により多くの信頼を置くラディスローの、その「言葉」の助けを借りることで、（彼と同じ考えを持つ）ドロシア自身の、おぼろげだった歴史観も補完されることになる。ラディスローが先に述べた、歴史を区切ることのおろかしさとは、全てがつながっている（リンクしている）というイメージで考えれば、それは、共同体のような区画を設けること自体の違和感とも結び付くのかもしれない。このことは、彼がミドルマーチという共同体になじまぬことや、最後にその地を去ることに表れているように思われる。エリオットは、（人との絆を大切にするのであれば）共同体のような土地には必ずしも縛られる必要のないことを、ラディスローを通じて示唆しているのかもしれない。

実際にローマを訪れたエリオットと、留学経験のないアンを比べれば、異国（ローマ）の描写に相違があるのはごく自然なことであり、共同体に

対する姿勢にも違いが生じるかもしれない。しかしながら、新婚旅行を通じてのヘレンとドロシアに共通していることは、孤独の感情である。異国に舞台を移すことにより、夫との溝を感じることで、二人は、人との繋がりを求めるという姿勢において共通していることも事実だ。信心深さと理想が強過ぎるゆえに、相手を顧みることができない、このヘレンとドロシアは、結果として夫を追い詰め、結婚の破綻に至る。しかしこれは、必ずしも負の結果をもたらすわけではない。

新婚早々の夫との喧嘩においてヘレンは、その怒りの激しさから、夫に度々「メス虎」(tigress) に例えられる。神聖であるべき家庭の天使と、残虐なメス虎のイメージは、明らかに相反するものであり、ここにヘレンと家庭の天使像との間にズレがあることが示されている。しかしここで重要なことは、虎の持つイメージが、ウィリアム・ブレイク (William Blake) の『経験の歌』(*Songs of Experience*) 中の「虎」(“The Tyger”) に代表されるように、必ずしもハンティンドンが意図したような、凶暴なものに限られないことだ。アンの生まれる前に発表された「虎」が人気を博し、以後、同時代の教養ある人々に広く口ずさまれ愛されていたことを考えれば、アンがブレイクの「虎」を知っていたことも十分に考えられる。虎を子羊と同等にとらえ、人間にはその両側面が必要であると考え、ブレイクが創作をしていた頃に進行していたフランス革命の情熱や熱気が、その虎の中に反映されているであろうことは興味深い。<sup>4</sup>アンの意図した虎は、このようなある種の情熱的で肯定的なイメージに近いのかもしれない。

ギルバートもまた弟から「虎」(tiger) に例えられることから、アンは、強さと情熱を備えた、ヘレンとギルバートによる同質の対等な人間同士の結びつきを、虎の比喩を通じて示しているのではないか。ハンティンドンとの結婚生活の中で、「ベットでいるよりは、パートナーでいたい」と語るヘレンは、まさにハンティンドンが屋敷で、慰みのために虐待する

「ペット」の犬になることを望むのではなく、対等な人間関係を体言する同種の「虎」としての、ギルバートの「パートナー」になることを選ぶのである。

ヘレンと同様に、ドロシアもまた夫との喧嘩の最中に、不毛な研究を続ける夫を非難する「スパイ」(spy)に例えられることで、もはや、夫に安らぎを与える家庭の天使とはなりえない。ヘレンとドロシアは共に、家庭の天使という狭い枠組みには納まりきれない女性と言えらるだろう。しかしこれは、けしてマイナスに作用していないことが分かる。理想から目覚め、夫の現実の姿に向き合った後、二人の女性は再び社会の網の目の中で、新たな人間関係を構築することで、真のパートナーにたどりつくことが、それを物語っているのだ。

### 3 ヘレンと芸術

夫の元を逃げだしたヘレンが、自立して生計を立てる手段となるのが「絵」であり、彼女がプロの画家の道を模索することからも、作中において芸術の果たす役割は大きいと言える。前作『アグネス・グレイ』(*Agnes Grey*)と比べると、芸術(絵)に関する描写が増えてはいるものの、作品全体を通じて、ヘレンの芸術活動に関する描写自体は、非常に少ないことも事実である。しかしこの、絵を描くという行為や、職業としての芸術が、ヘレンを、ギルバートや彼の周囲の人物たちと結びつける上で重要な役割を果たしている。また、芸術を通じて結びつけられるヘレンとギルバートの関係は、『ミドルマーチ』のドロシアと芸術家肌のラディスローのそれと興味深い対照をなしているのだ。

ワイルドフェル・ホールでのヘレンは、さらなる画材を求め、ギルバートをはじめとするリンデン・カーの人たちに案内され、ベイでのピクニック

クに向かう。この「絵」を職業として選ぶことで、ヘレンは今まで縁の無かった、そこに暮らす下層中産階級の人々と接点を持ち、我々は二つの領域が互いに関連していることに気がつく。ヘレンの意図とは反しながらも、彼女は「絵」を通じて、周囲の人間模様の中へと組み込まれてゆく。また、ヘレンが職業を持つことで、彼女と自作農 (gentleman farmer) として農作業に従事するギルバートとの間には、いわゆる「職業人」という共通項も生まれることになる。ここではヘレンを、ギルバートと彼の属する共同体 (社会) の人々と結びつける状況を作り出す道具として「芸術」(絵) が作用していることが分かる。

クリフでの写生の折に、ヘレンは「自分の絵の自信のない点について」ギルバートの「好みや批評を求め」、彼が「示した手直し案をためらいもなく受け入れ」る。絵を売りに出す直前にも、「あなたのご意見を聞かせてください」と彼に助言を求めることで、ヘレンが、ギルバートの芸術に対する眼識を完全に信頼していることが分かる。ギルバートもまた、彼女の絵に「心からの賞賛」を与えることで、彼にも絵を鑑賞する芸術的なセンスがあることが示されている。ヘレンとギルバートは、ともに絵に関心を持ち、二人は芸術を通じての同質的な関係で結ばれている。ハンティンドンが、ヘレンの絵道具を火の中に投げ入れる態度に表されるように、彼には絵や芸術に対する興味はない。一方のハーグレイヴ (Walter Hargrave) は、ヘレンの前で「一般的絵画論」を語り、絵の知識はあるものの、執拗に迫るハーグレイヴに身の危険を感じるヘレンが、「パレットナイフを掴むと、それを彼に突きつけた」ことが示すように、ヘレンがハーグレイヴと芸術的な喜びを共有することはありえないのだ。

芸術にとどまらず、ギルバートは、ヘレンと「花や樹木や本」のことを語り合い、本の貸し借りを通じて、彼女と共通の感情を共有している。Josephine McDonagh の指摘するように、ヘレンとギルバートの結び付き

は、感情を基盤とした関係である。<sup>5</sup>したがって、芸術を味わうという感情をヘレンと共感（共有）できないハンティンドンとハーグレイヴは、身分ではギルバートより上であろうとも、ヘレンの真のパートナーにはなりえない。

作品の冒頭でギルバートは、ヘレンのアトリエに隠すように後ろ向きに置かれた、「青春真っ盛りの男性の肖像画」を偶然に見つける。これは、以前にヘレンが、ハンティンドンを描いたものであり、ここでギルバートは、プロット上ではけして対峙することのないハンティンドンと、肖像画という「絵」を通じて向き合うことになる。二人が対面するこの唯一の場面は、作品の冒頭でもあり、絵の人物が誰かという謎を読者に示し、プロット上の伏線になっていることも確かであろう。しかしここで重要なのは、一見すると無関係に思われる互いの人間関係が、実は複雑に絡み合っていることの一部を、アンは、この「絵」を通じて二人が対峙する場面を作ることによって我々に示しているのではないだろうか。

『ミドルマーチ』に登場する芸術家肌のアウトサイダー（異国人）ラディスローもまた、彼の意味とは反して、複雑なミドルマーチという共同体の人間関係の中に巻き込まれてゆく。ヘレンとギルバートの芸術（絵）を通じて結ばれる関係が、ラディスローとドロシアのそれともある種の対照をなしているのだ。

ラディスローがドロシアに出会う初めての場面で、彼は「スケッチブック」を持って登場し、また二人が再会する重要な場面は、ローマのヴァチカン美術館でなされる。さらには、ミドルマーチで二人が意図せず再会するのは、ラディスローが、置き忘れた絵のスケッチとその道具を、ティプトン屋敷で整理している最中のことだ。二人の重要な出会いには、絶えず芸術（絵）が介在していると言えるだろう。ラディスローは、「ドロシアが散歩に出れば必ず会えそうな位置でスケッチに」精を出すことで、ドロ

シアとの出会いのために芸術を利用する。

ドロシアは、「絵のことは、いつもわたくし、ほかのことよりもっとわからないのですもの」と述べ、自身の絵（芸術）に対する眼識のなさを口にしてしている。しかし、ローマでは、ラディスローの解説（言葉）を聞くことで、「それまでは怪奇としか思われなかったものも、次第に理解できるように」なる。これは、二人の関係が、芸術（絵）を通じて得られる楽しみを共感できる、同質的な人間同士の結びつきであることを示している。

ローマから帰国後、ドロシアが、今までは何も感じなかったジュリア（Julia）の絵を見て「親しみを感じ」興味を示すことも見逃せない。ドロシアは、ラディスローにとっては祖母にあたる、このジュリアの絵と、自身自身の間の「不幸な結婚をした」という共通項を見出し共感しているのである。またこれは、先にみたギルバートとハンティンドンの肖像画の対面が意味するのと同様に、ドロシアとジュリアが、「絵」を通じて対面することで、人間関係の複雑な絡み合いの一端が示されているのだ。以上のように、絵（芸術）が人と人の結び付きを示すための比喻としても用いられていることが分かる。

家庭の天使となるべく育てられたヘレンが、絵で生計を立て、プロの芸術家としての本領を発揮するには、プロットの上でやや違和感があることも否めないかもしれない。しかしこの作品では、既に指摘したように、ヘレンという芸術家が、周囲との交流の中で描かれていることが重要なのだ。つまりはプロット上、芸術（家）の中身までは問わないので、ヘレンは真の芸術家タイプである必要はないと言えるかもしれない。

一方、ミドルマーチの人にとって、ポーランドとユダヤの血を受け継いだ怪しいアウトサイダーと映るラディスローは、ミドルマーチでの交流に巻き込まれた後、ドロシアと共にその共同体を去ってゆく。エリオットの作品では、真の芸術家タイプは、異国的な要素を持ち合わせるのが必然

であるため、ラディスローのようなアウトサイダー（異国人）となる必要があったと考えられる。これは、多様な芸術家タイプを描き分けたエリオットの最後の小説『ダニエル・デロンダ』（*Daniel Deronda*）の中で、芸術の才を持ち、ユダヤ人という強い絆で結ばれたデロンダとマイラ（Mirah Lapidoth）が、イギリス（共同体）を出て、外に向かうことにも関連するかもしれない。

アウトサイダーではない芸術家のヘレンが、元のスタンディングリーに戻ることを考えれば、ラディスローとの違いも明らかになる。しかし、ここで重要なのは、繰り返し述べているように、芸術（絵）が人と人を結び付けていることにあるのだ。アンが用いたその用法をエリオットも踏襲したことが、ヘレンとギルバートという二人の繋がりを、ラディスローとドロシアとのそれと比べることで、明らかになったのではないか。

## おわりに

以上のように、ヘレンとギルバートを中心とする人々との関わりを分析することで、エリオットの作品に通じる多くの要素があることが明らかになった。十九世紀初めのオースティン（Jane Austen）の社会が、ごく限られた狭い範囲のジェントリー階級の人々により、網の目が構成されていく一方、ヘレンはその狭い枠組みを飛び出し、より広いギルバートをはじめとする人々の網の目の中に巻き込まれてゆく。ヘレンは、そこでの人々との交流を通じて、自身も社会や共同体を構成する重要な一部であることを認識するに至る。これは、エリオットによる、複雑多岐にわたる人間関係からなる共同体へと引き継がれ、我々は、近代化と同時に複雑化する社会の中で暮らす人々の連帯（絆）を見るに至る。

作中では、神という言葉が多用され、アン自らが信仰を大切にし、作品

にその姿勢が色濃く反映されていることも事実である。したがって、主権を人間に置き「人間が人間にとっての神である」と結論づけるフォイエルバッハに代表される考えと共に、神に替えて人間を中心に据え、人と人との絆を強調したエリオットの考えとは、アンは異なるかもしれない。<sup>6</sup>しかし、同世代を生きたアンもまた、宗教的に懐疑の時代に生きたからこそ、聖書を何度も読み替え、独自に解釈することで万人救済論を唱え、さらには、人間同士の絆や繋がりそのものに目を向けるに至ったのではないか。ヘレンもまた現実社会の中で、人々との交流を持つことで、問題を解決していくのだ。階級や宗教云々を超えた次元で救われるヒロインを、アンは描きたかったと言えるかもしれない。

本稿は、中央英米文学会『中央英米文学』第44号（2010年12月）に掲載した論文を大幅に加筆修正したものである。

## 注

テキストには、Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, ed. Herbert Rosengarten (Oxford World's Classics, 2008)、および George Eliot, *Middlemarch*, ed. David Carroll (Oxford World's Classics, 1998) を用いた。日本語については、山口弘恵訳ブロンテ全集9『ワイルドフェル・ホールの住人』（みすず書房、1996年）と、工藤好美・淀川郁子訳『ミドルマーチ』全四巻（講談社文芸文庫、1998年）からそれぞれ引用した。

- 1 ヘレンとギルバートの住む場所の高さ（位置関係）の議論は、次の論文を参考にした。Peter Merchant, "Introduction". *The Tenant of Wildfell Hall* (Ware: Wordsworth Classics, 2001), p.x.
- 2 『ミドルマーチ』における、いわゆる web のイメージと、作品における unity の関連については、例えば、John Rignall ed., *Oxford Reader's Companion to George Eliot* (Oxford: Oxford UP, 2001) の "Critical Approaches" の項参照。

- 3 John Sutherland, *Is Heathcliff a Murderer? : Puzzles in Nineteenth-Century Fiction* (Oxford: Oxford UP, 1998), pp.73-77.
- 4 ブレイクについては、P. アクロイド『ブレイク伝』（2002年、みすず書房）を主に参照した。
- 5 Josephine McDonagh, “Introduction”. *The Tenant of Wildfell Hall* (Oxford: Oxford UP, 2008), p.xxvii.
- 6 K. レビット、W. ポーリン、桑山正道、斎藤信治訳『フォリエルバッハ』（1971年、福村出版）、第五章「キリスト教の本質」を主に参照した。

#### 主要参考文献

- Ashton, Rosemary. *George Eliot :A Life*. London: Hamish Hamilton, 1996.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfield and Nicolson, 1994.
- Davies, Stevie. Introduction. *The Tenant of Wildfell Hall*. London: Penguin Books, 1996.
- Nash, Julie and Barbara A. Suess, eds. *New Approaches to the Literary Art of Anne Brontë*. Aldershot: Ashgate, 2001.
- 海老根宏、内田能嗣編著『ジョージ・エリオットの時空』北星堂書店、2000年
- 大田美和『アン・ブロンテ 二十一世紀の再評価』中央大学出版部、2007年
- 中岡洋、内田能嗣編著『アン・ブロンテ論』開文社出版、1999年
- 深澤俊『慰めの文学—イギリス小説の愉しみ』中央大学出版部、2002年